

小規模校の良さを生かし、中学校への円滑な接続を図る教育の推進

～宇宙留学（山村留学）制度と
小中一貫教育の推進～

地域の
特色ある
活動

鹿児島県南種子町教育委員会

1 はじめに

南種子町は、鹿児島県の離島、種子島の南部に位置し、人口約 5700 人、面積 110 km²、農業を基幹産業とする小さな町である。

1543 年に鉄砲（火縄銃）が伝来した地として、また、JAXA の種子島宇宙センターがある町として知られている。

現代においても古代米赤米が栽培されており、古式ゆかしく行われる御田植祭は、国の無形民俗文化財として指定されている。さらに、弥生時代後期後半から古墳時代にかけてつくられた集団墓地は、国史跡として、その出土品は国の重要文化財として知られている。民謡や踊りなど郷土芸能も多く、それらの伝承が小中学生を含めた若い世代に期待されている。

本町には、町立保育園 1 園、私立認定こども園 1 園、小学校 8 校、中学校 1 校があり、高等学校はない。小学校は、町中心部に 1 学年 1 学級の学校が 1 校あり、その他は周辺部に位置し、複式学級を有する極小規模校である。それまで 5 校あった中学校は平成 6 年度に統合し、町中心部に開校している。高等学校は、県の高等学校再編整備により隣町に統合移転して 10 年になる。

2 宇宙留学制度の推進

(1) 制度開始の背景と受入れ状況

町周辺部の地域では、中学校統合により、地域の活力が減退しはじめ、いずれは小学校も統合して地域から学校がなくなってしまうことへの危機意識から、平成 8 年度に 2 校が留学生の受入れを始め、現在は 7 校が留学生を受入れている。

町は離島活性化交付金を活用して、複式学級の解消や留学生と地元の子供たちの交流に

よる教育活動の充実、地域の活性化をねらいとして、南種子町宇宙留学連絡協議会に補助金を出し、里親留学、家族留学、親戚留学を実施している。これまで 23 年間に 1430 人の申込みがあり、715 人が留学している。今年度は、里親留学 32 人、家族留学 10 家族 16 人、計 48 人の留学生を受入れている。その結果、入学式が実施できた学校が 2 校、複式学級が解消された学校が 3 校、7 校全てが 3 学級以上の学校になった。

(2) 受入れ校における教育活動と教育効果

これらの 7 校は、留学生を含めても児童数は 14 人から 30 人であるが、学校や地域で、ウミガメの保護活動、筏による川くだり、一輪車を使った体力づくり、郷土芸能の伝承など様々な教育活動を行っている。また、町内に宇宙センターがあることから JAXA の出前授業で宇宙に関する体験活動も行っている。



郷土芸能（棒踊り）



サーフィン教室

これらの活動を通して、留学生は、今まで経験したことのない体験や地元の子供に教えてもらって達成できたことに喜びを感じている。地元の子供は、毎年度交代する留学生との人間関係の構築などの苦労はあるが、学級編制を経験でき、両者とも充実した学校生活を送っている。

3 小中一貫教育の推進

(1) 施設分離型の小中一貫教育

これまでは、小規模校が 2 グループに分かれて、宿泊学習や修学旅行などを合同で行ってきた。しかし、中学校に進学した際、新た

な環境の中で孤立する生徒が見られた。また、中心部の1校は、クラス替えがないため人間関係が固定化されており、生徒指導上の懸念があった。平成27年度当初、「小学校は地域コミュニティの核としての性格を有するから統合しない」との首長の方針であったので、施設分離型の小中一貫教育を推進することにした。

(2) 「つながり」の創生

学び・人・育ちのつながりにより、コミュニケーション能力を高め、「ふるさとを誇りに思い、深く学び、心豊かで、たくましい南種子の子供」を育成するという考えの下、平成27年度に構想を立て、平成28年度から実質的な取組を始めた。

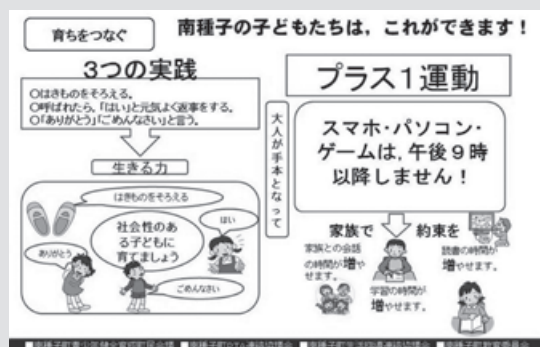
「学びをつなぐ」では、各学校が、実態に応じた学習指導上の「こだわりの視点」を設定し、基礎学力の定着を図っている。また、9年間を見通した系統性・連続性のある教育活動を推進することとして、学習習慣系統表(学校用)や家庭学習習慣系統表にそって全小中学校で学業指導を行うことにした。さらに、町内小学校全児童が参加する集合学習を低・中学年は中心部の小学校で行い、高学年は中学校で交流学习として行っている。

項目	小学校			中学校
	低学年	中学年	高学年	
授業前	始業の準備 ○1分前に整座する。	○1分前に整座し、ノートに必要なことを書いておく。	○2分前、授業開始 ○1分前、整座	
授業中	あいさつ ○教師の話を聞いて、背筋を伸ばし、明るく元気な声で挨拶をする。	○教師の話を聞いて、背筋を伸ばし、はっきりあいさつする。	○教師の話を聞いて、背筋を伸ばし、はっきりあいさつする。	
	返事 ○名前を呼ばれたら、「はい」とはっきり返事をする。			
態度	机上の整理 ○えんぴつ、筆、消えんぴつ(ペン)、消しゴム、定規などを準備する。 *整えられはしない。		○学習内容に応ずる。 *整えられはしない。	
	姿勢 ○足を床につける。 ○背筋を伸ばす。 ○背もたれに背中をつけない。 ○書く時は、目の距離を30cm離す。			
話し方	○発表する時は、背筋を伸ばして「はい」を1回だけ言い、準備する。			
	話し方 ○聞く人の方を見て、みんなに聞こえる声で最後まではっきり話す。 *声のものをさしはしない。	○聞いている人の顔をみて、適切な声の大きさ、速さで最後まではっきり話す。 *声のものをさしはしない。	○聞いている人の顔をみて、相手・目的・し方を思い分ける。 ○最後まではっきり話す。 ○前に述べた人の意見の内容を受けて話す。	
授業後	○話す人に体を向けて、自分の考えと比べながら、うなずくなどして最後まで聞く。		○必要に応じてメモを取り、自分の考え最後まで聞く。 ○うなずきやつぶやきなど、適切に反応する。	

「人をつなぐ」では、社会的な自立を目指す積極的な生徒指導を推進し、前述の集合学習や交流学习の中でも道徳の授業を行うなど、道徳教育の充実を図っている。また、県の小中連携加配を活用し、中学校の連携担当教諭に町内全小学校で授業をさせ、中学校教員と次年度以降中学校に入学する児童や小学校教員とのつながりをつくっている。

「育ちをつなぐ」では、地域に開かれた学校づくりを推進し、スタートカリキュラムによる幼保小の連携を図るとともに、「みなみ

たね家庭教育10章」を重点化した「3つの実践、プラス1運動」に町P連と連携して取り組んでいる。また、各学校では「1校1運動」を推進し、体力の向上を図っている。



(3) 期待する効果

児童生徒の成長を義務教育9年間でとらえ、小学校と中学校のつながりを意識した系統的・継続的な指導を行うことで小・中学校間のシステムの違いによって生じる課題が解決されることを期待している。また、小・中学校で共通のめざす児童生徒像を設定し、発達段階に応じた学習習慣や生活習慣の定着を図り、児童生徒の確かな学力・豊かな心・健やかな身体を育むとともに、一人一人の能力や個性の伸長が図られることを期待している。さらに、小・中学校の異学年交流や地域での異世代交流の場では、コミュニケーションの機会を増やすことで中学生のリーダー性を発揮させ、自尊感情を高めることを期待している。教職員については、それぞれの指導内容や指導方法の交流を図ることにより、授業改善や教職員の指導力向上の契機となり、教職員の意識改革が図られることを期待している。

4 おわりに

地域コミュニティが希薄化しつつあり、児童生徒数も徐々に減少している。今後も、宇宙留学制度を工夫するとともに、小中一貫教育をさらに充実させたいと考えている。



教育長
遠藤 修